

〈連載〉

文：青柳菜摘（コ本や honkbooks）

一匹の書物

生物学論争から読みとく創造の起点

古書店であり、アートの実践の場でもある「コ本や honkbooks」が、『文化と生物学』をテーマに、店内に眠る一冊を紹介する本連載。0号では半世紀以上前に出版された、遺伝学にまつわるさまざまな論争を巻き起こした生物学者・パウル・カンメラーについてのドキュメンタリー『サンバガエルの謎—獲得形質は遺伝するか』アーサー・ケストラー著を紹介する。

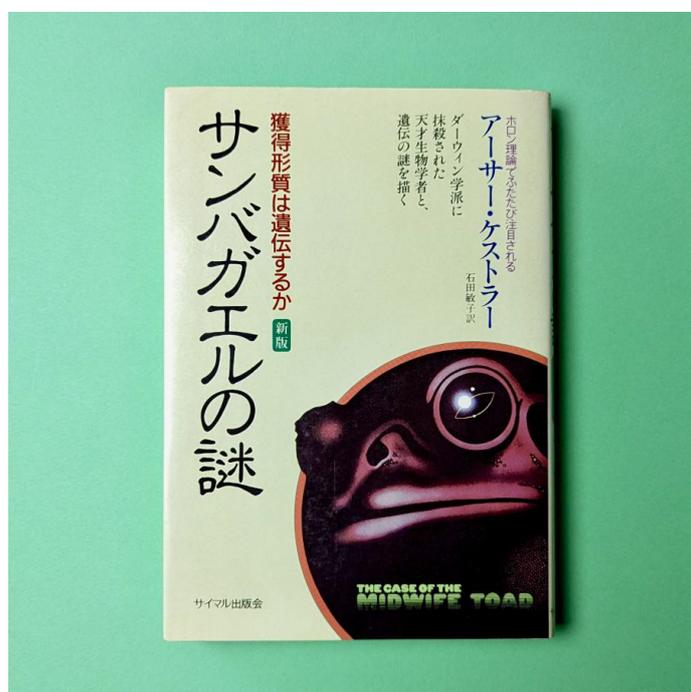


Figure 1. 『サンバガエルの謎—獲得形質は遺伝するか』（サイマル出版会）
アーサー・ケストラー、石田敏子訳、1971年刊行

『機械の中の幽霊』（ちくま学芸文庫）で「ホロン」という概念を提唱するなど、科学思想における認識の転換を促したアーサー・ケストラーは20歳のとき、ある生物学者の遺体を見つけた。遺体に添えられた遺書には、自身の遺体は家族の眼に触れぬよう大学の研究所で解剖でもしてくれと書かれている。この生物学者パウル・カンメラーは、両生類、サンショウウオやサンバガエルなどを異質な環境下で飼育実験し、環境により獲得とした形質は遺伝する、と主張した。つまり、ダーウィンの自然淘汰理論に反旗を翻す理論を打ち立てようとした。しかし、ダーウィン派により実験が偽造されたものだと攻撃され、ついに自死にいたったのだった。本書ではケストラーによってカンメラーの実験とその真偽、批判の経緯が記される。

『文化と生物学』をテーマに、コ本やにある本を紹介するコーナーが立ち上がりました。わたしたちが扱う古書というのは、新刊書店と大きく違う点として、いつなんの本がやってきて、去っていくのか、自然のなかを観察するように、先読みができません。だからこそ、何度訪れても驚きがある場所であり続けられるのかも知れません。

『サンバガエルの謎』は、生物学でおきた論争について本ではありますが、カンメラーの最期をみるに、打ち立てられた理論とその批判を読み解くことが本質ではないように思います。生物を考えることは、進化を考えることであり、環境を考えることであります。たとえば『機械の中の幽霊』から『攻殻機動隊 / THE GHOST IN THE SHELL』が生まれたように、読み解けない、その先にあるものを表現できるのが創造すること、制作することなのではないでしょうか。また、カンメラーは一日中実験室で生物たちと向き合いながら、夜はピアノに向かいシンフォニーを作っていたといえます。わたしたちは創造することで環境を身体に受け取り、やっと自分が立つ地を知ることができるかもしれません。

コ本や honkbooks

2016年6月より活動するプラクティショナーコレクティブ。映像や書籍の制作、展覧会やイベントを企画するメディアプロダクションとしても活動する。活動拠点として「コ本や honkbooks」を運営し、プロジェクト・スペースとして「theca (テカ)」を併設する。青柳菜摘 / だつお (アーティスト)、中島百合絵 (企画制作ディレクター) 主宰。2023年4月に拠点を神楽坂に移転し、書店兼プロジェクト・スペースとしてグランドオープンした。

住所：東京都新宿区山吹町 294 小久保ビル 2 階

開館時間：12:00～20:00

休業日：火～木

<http://honkbooks.com/>

編集部メモ

本書は 2002 年に岩波書店から再販されており、日本の生物学界における巨人であった発生生物学者・岡田節人による解説が寄せられている。岡田氏による解説の中でも触れられているように、獲得形質の遺伝 (ラマルキズム) はその立証を巡る数々のスキャンダルから少なからずタブー視されてきた歴史があり、また進化のメカニズムをめぐる理解としては、今日でもラマルキズムが実証されているとは言い難い。しかしながら同解説に述べられているように、今やカンメラーの名は科学史の一ページとして冷静に省みられるに至っており、『文化と生物学』の一側面を描写しているものとして読まれることを願う。詳しくは本書とあわせて、岡田氏による解説を読むことを強く推奨する。